

## 全学共通科目「世界の中の日本」での国際協働 PBL 授業の実践

国際交流センター助教 かぶらぎ えみ 蕪木 絵実

国際交流センター教授 チャン・チェオン・ジェン

米国バーモント大学日本語専任講師 すずき かずこ 鈴木 和子

## 1. はじめに

鳥取大学国際交流センターではこれまでに「タフで実践力のあるグローバル人材の育成」を目指し、様々な海外渡航プログラムを開発し実施してきた。一方昨今では、新型コロナウイルス感染症の影響を受け、海外渡航に頼らない持続可能な人材育成プログラム等の開発の必要性が高まってきている。また、学生の育成をめぐるキーコンセプトの一つとしてアクティブ・ラーニングが掲げられ、学生の「主体的な学び」の重要性が強調されている。アクティブ・ラーニングを取り入れて学生の学びを養成する手段として、課題解決型学習 (Problem/Project Based Learning: 以下 PBL) やピア・インストラクションが挙げられ、最近ではコロナ禍におけるグローバル人材育成の方策として、PBL とオンライン国際協働学習 (Collaborative Online International Learning: 以下 COIL) を融合させた COIL-PBL を教養授業やオンライン留学プログラムで実施する大学が増えている。このような背景から、海外渡航による体験に頼らずとも、「主体的な学び」を通して学生がグローバル人材として必要な能力を養成することを目指し、米国・バーモント大学生とのオンラインを利用した国際協働 PBL を、全学共通科目「世界の中の日本」で実施した。本稿ではまず、先行研究で実施されている PBL について概観した上で、筆者らが新たに授業で実施した国際協働 PBL の取り組みに係る計画からその実施結果について報告する。

## 2. 主体的な学びの育成

近年の急速なグローバル化や社会情勢、社会構造の変化に伴い、経済産業省が提唱する今後必要とされる社会人基礎力である「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」がますますその重要性を増している (経済産業省 2018)。こうした変化に対応するように、教育機関にもとめられる教育のあり方も大きく変わってきており、1998 年の文部科学省が提出した答申では学生が「主体的に学ぶ」ことの重要性が述べられるようになる。さらに中央教育審議会 (2012) における答申では、学生の「主体的な学び」への教育転換が提示され「アクティブ・ラーニング」という言葉が用いられるようになった。

アクティブ・ラーニングについて話すとき、その定義を明らかにしておく必要がある。溝上 (2014) によると、「一方向的な知識伝達型講義を聴くという (受動的) 学習を乗り越

える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う」とある。もちろん、教員が一方向的に話す講義型の授業が専門教育に重要であることはいうまでもない。アクティブ・ラーニングはあくまでも学生の学習を促す手段の一つとして選択・利用されるべきで、本来の学習目的を見失わないよう、実施の際には注意する必要がある（栗田 2017）。そのため、上記で挙げたような学生が社会から求められている力を、従来の受動的な学習の中でいかに涵養させるかが重要であると筆者らは考えている。

学生の主体的な学びを育むアクティブ・ラーニングの一つに、学生が自身の探究心に基づいて課題解決に取り組む PBL がある。PBL は学生自身を学習の中心に据えた手法で、協働的、進歩的、対話的、能動的な深い学びをもたらす学習アプローチとして広く認知されている（Jalinus 2017）。この PBL を用いることで「課題に取り組む過程で、学生は協調性を身につけ、自身の価値観、倫理観、信念を内省することで責任感を育むことができる」（Coral 2009）といった効果が得られる。こうした点に筆者らは注目した。

学生の主体的な学びを育成するもう一つの学習法として、「国際協働学習」があり、国際的に行われる共通の課題目標や活動を通じた相互学習と定義されている（Lee and Tsai 2011）。国際協働学習は、学生のグローバルマインドや地球市民としての責任を育むとされる（Neal 2013）。また最近では、ICT 技術の進歩により、自身の国や教室を出ることなく海外にいる教員や学生と容易に「つながる」ことができるようになった。こうしたオンラインを利用した国際協働学習が異文化コミュニケーション能力の強化に役立つことが既に様々な先行研究からも明らかとなってきた（Hagley and Thomson 2017）。昨今日本の高等教育で多く実施されている代表例として、COIL がある。COIL は、オンライン上における表面的な交流ではなく、分野間の壁を越えた双方向型のオンライン国際協働学習のことである。こうしたなかで、筆者らも 2020 年度に単発的な海外協定校の学生との様々なオンライン交流プログラムを国際交流センターで実施し、学生が「異文化に触れる」という目標は達成できた。しかし「国際感覚を身につける」という、より発展的な学びの獲得においては、PBL や COIL などを用い時間をかけた交流を行っていく必要性を課題として挙げている（蕪木他 2021）。

鳥取大学のグローバル教育プログラムで育成を目指している能力に A) 「グローバル人間力」、B) 「グローバルリテラシー」、C) 「グローバルコミュニケーション力」がある。教養教育の中で、学生がこれらの能力をはじめとする基本的な国際通用性を身につけることを目的として、平成 25 年度から「グローバル教育基礎科目群」を全学生対象に開設している。この科目群は、海外への意識やチャレンジ精神を養成しながら、日本と世界の歴史・文化、政治・経済、自然・生態等に関する様々な基礎知識を習得するとともに、外国語運用能力はもとよりプレゼンテーション・ディベートなど様々な情報の受信・発信技能を修得することで、グローバル化に対応した人材を育成することを目的としている（2021 年度全学共通科目履修案内）。筆者らが担当する「世界の中の日本」は、このグローバル教育基礎科目群の一つであり、上記 B) と C) の能力修得を目指す。また、鳥取大学教育課程の国際通用性向上のための取り組みとして、「英語で学ぶ授業科目の拡充」が掲げられ、「世界の中の日

本」も英語でのコミュニケーションを授業の中に取り入れている。上記のことを踏まえ、「世界の中の日本」では①国際的なコミュニケーション力を高めるとともに、②世界の中の日本を概観し文化習慣や価値観の違いについて学ぶこと、の二つの授業目的をシラバスに提示している。

本稿では、学生のグローバル能力育成を目指す「世界の中の日本」で掲げている上記二つの目的を、学生が主体的な学びの中で達成することを目指して実施した国際協働 PBL の取り組みについて報告する。

### 3. 国際協働 PBL「世界の中の日本」の概要

国際交流センターでは学生がコロナ禍でも積極的・継続的に異文化に触れることで国際感覚を身につけられるよう、海外協定校の現地学生や、学内の留学生とのオンライン/対面交流プログラムを新たに数多く実施してきた（蕪木 他 2021）。その一つとして、2021年4月から定期的に米国バーモント大学で日本語の授業を履修している学生と鳥取大学の学生との、日本語と英語を使ったオンライン交流を行なっている。その際大変良い交流ができたことから、「異文化に触れる」体験の提供だけでなく、「国際感覚を身につける」といったより発展的な学びを学生に提供できないかと、オンライン国際協働学習と PBL の手法を組み合わせた継続的な交流を授業の中で実施するに至った。バーモント大学からは日本語クラス「Studies of Japanese Texts 1」を履修する4年生10名が参加した。鳥取大学からは全学共通科目「世界の中の日本」を履修する12名の学生が参加し、全15回の授業のうち4回をオンライン交流に充てた。オンライン交流ではお互いのターゲットランゲージ（目標言語）を用い、バーモント大生は日本語、鳥取大生は英語で交流を行った。

#### 3-1. 学生の到達目標

PBL を実施しながらも、鳥取大学・バーモント大学それぞれの授業目標が達成できるようシラバスを作成していく必要がある。本取り組みでは、以下のことを両校の学生の具体的な共通到達目標として設定し、シラバスに記載した。

- ① 英語・日本語力の向上および言語学習への意欲が高まる
- ② 相手の意見を尊重しながら自分の意見を伝え、コミュニケーションを取りながら相互理解を深める
- ③ 異文化や日本・鳥取の文化に興味を持ち視野を広げることができる
- ④ 仕事に役立つコミュニケーション力を身につける

#### 3-2. 授業計画と特徴

バーモント大学があるバーモント州と鳥取県は、2008年より国際親善に関する覚書を取り交わし、2018年より姉妹提携の協定を締結している。そこで PBL の実施にあたり、「お互いの地域について学び、グループで両地域の特徴を活かしたコラボレーションデザインを考える」という課題を設定した。

授業計画として、お互いの地域の特色を紹介することから始まり、それらの特色を表現するアイコンの紹介・制作、デザインの制作・融合、そして最後に両地域の特色を反映させた一つのデザインを発表し、グループ毎にプレゼンテーションを行った。なお全体として、①交流のための準備、②オンライン交流、③交流のふりかえり（個人・相互）の3つの作業を全15回の授業を通して繰り返し行えるよう計画した（表1）。

表1 「世界の中の日本」授業計画

回	授業展開	課題	使用ツール	使用言語
1	授業ガイダンス			
2	交流のための準備	自己紹介、お互いの地域の特色を紹介	Zoom、PPT※	鳥取大生は英語、バーモント大生は日本語
3	オンライン交流			
4	交流のふりかえり			
5	交流のための準備			
6	オンライン交流	地域の特色を表現できるアイコン紹介・制作	Zoom、PPT	
7	交流のふりかえり			
8	交流のための準備			
9	交流のための準備	デザインの制作・融合	Zoom、PPT、Google Jamboard	
10	オンライン交流			
11	交流のふりかえり			
12	交流のための準備	デザインの発表とプレゼンテーション	Zoom、PPT、Google Jamboard	
13	交流のための準備			
14	オンライン交流			
15	協働学習・交流のふりかえり			

※PPT：パワーポイント

本授業の特徴としては、少人数グループでの協働学習や、ターゲットランゲージの使用、オンライン交流の事前・事後に時間をかけるほか、毎交流後のふりかえり（個人・相互）、デザイン作成ツールとしてGoogle Jamboardの使用、授業時間外のSNSメッセージのやりとり、などが挙げられる。

### 3-3. アンケート調査の方法

各自が到達目標を達成できたかどうかを評価する方法として、両校の学生同士が毎回の交流のふりかえり（アンケート）を行う形成的評価（Formative Evaluation）を取り入れた。これにより、学生が自らの学習状況を客観的かつ正確に捉え、明確な目標をもって学習に取り組むことを目指した。毎回の交流後に行ったふりかえりアンケート（全4回）の質問項目を以下に示した。また、全15回の授業終了後には、自由記述のふりかえりレポー

ト提出を課した。これらアンケート等の実施にあたっては、対象者となる学生に趣旨を説明し、個人情報の取り扱いについての同意を得ている。

〈交流後のふりかえりアンケート質問項目〉

- ・自分自身のパフォーマンス評価（1～10段階評価）
- ・交流の中でうまくできたこと
- ・交流の中でうまくいかなかったこと
- ・次回の交流でがんばりたいこと
- ・バーモント大生とのコミュニケーションで気づいたこと（自分との違いなど）
- ・その他/感想

#### 4. 学生の「ふりかえり」から見えたこと

国際協働 PBL を通して両校の学生がどのようなことを感じ学んだのかについて、「学生の到達目標」と比較しながら、4回目交流後のふりかえり結果を一部紹介する（表2）。

表2 4回目交流後のふりかえりアンケート/レポート抜粋

	学生の達成目標	鳥取大生	バーモント大生
1	英語・日本語力の向上及び言語学習への意欲が高まる	<ul style="list-style-type: none"> <li>・毎日日本語を勉強しているバーモント大生が、自分の英語学習のモチベーションである。</li> <li>・授業を通して英語の勉強を熱心にするようになった。</li> <li>・英語が話せないなりに、前もって準備することの大切さを学んだ。</li> <li>・英語力を上げることでもっと深い話ができより親密な関係になれると思った。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ I will work on my language skills so I can communicate better with the Tottori students.</li> <li>・ I hope to be able to be more fluid and not stutter as much when speaking. I should use the opportunity to go for it and focus on fluidity rather than accuracy.</li> <li>・ It was great practice trying to form sentences live with native Japanese speakers.</li> </ul>
2	相手の意見を尊重しながら自分の意見を伝え、コミュニケーションを取りながら相互理解を深める	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の思いを察してもらうのではなく、考えを明確に伝えることが重要だと学んだ。</li> <li>・自分の意見に固執せず、公平な立場で物事を見て他の人の意見を尊重することの素晴らしさを学んだ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ We all were open minded and let everyone have control over the final draft.</li> <li>・ We worked together and were able to figure out what each other was trying to say.</li> </ul>

3	異文化や日本・鳥取の文化に興味を持ち視野を広げることができる	<ul style="list-style-type: none"> <li>・世界をマクロで見るとはなくミクロで見ることによって新しい発見をすることも大切だと思った。</li> <li>・この授業を通してさらに海外に興味を湧いた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ I really enjoyed learning about Tottori—it's not someplace I knew about before.</li> <li>・ I enjoyed learning from the Tottori students about their school and their city.</li> </ul>
4	仕事に役立つコミュニケーション力を身につける	<ul style="list-style-type: none"> <li>・常に質問を考えながら相手の話を聞こうと意識したことで、交流がどんどん上手くいったように感じた。</li> <li>・良いコミュニケーションには、リアクションを大きくするなど聞き上手になることも重要であることを学んだ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ We did a good job of trying to communicate well with each other.</li> <li>・ We knew what we wanted to create and developed an explanation for why.</li> <li>・ We were able to make the final changes with ease and agree on our design.</li> <li>・ Everyone had really good ideas for the designs, and I loved how cooperative everyone was!</li> </ul>
5	その他の気づき	<ul style="list-style-type: none"> <li>・バーモント大生も一生懸命考えを伝えようとしてくれたので、自分も頑張ろうと思えた。</li> <li>・英語を「話す」と「会話する」では全く違うことがよく分かった。</li> <li>・毎回の交流で前回の反省を活かした交流ができたため、自分の能力の向上を感じ取ることができた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本語で話すのは恥ずかしかったが、みんなも同じように恥ずかしくて、それが私に自信をくれた。みんなが悩んだら悩む必要はないと感じた。</li> <li>・ I learned that speaking a target language is entirely different when talking to others versus being on one's own.</li> <li>・ They also tried very hard to really communicate with us, so it felt like an equal exchange in each conversation.</li> </ul>

### ① 英語・日本語力の向上及び言語学習への意欲が高まる

「バーモント大生の日本語に取り組む姿勢が刺激になった」、「授業を通して英語の勉強を熱心にするようになった」など、英語学習への意欲の高まりが多くの子で見られた。また、バーモント大学側教員の後日談によると、4年生の後期に日本語を履修しない学生がたいていいるのだが、今回参加した4年生は全員後期も履修登録をしているそうだ。このことから、国際協働 PBL が両校の学生の語学力・学習へのモチベーション向上に良い影響を与えていると言って良いだろう。

### ② 相手の意見を尊重しながら自分の意見を伝え相互理解を深める

「自分の考えを明確に伝える」ことや、「自分の意見に固執せず公平・柔軟に対応することの重要性を学んだ」など、課題解決に向けて自分の考え・意見を積極的に発信する必要がある PBL だからこそその気づきを得られていることが窺えた。

### ③ 異文化や日本・鳥取の文化に興味を持ち視野を広げることができる

純粹にそれぞれの国・地域への関心の高まりが見られたことに加え、「国（マクロ）として見るだけでなく地域（ミクロ）で見ることで新しい発見があった」など興味深い意見もあった。また、バーモント大生の一人はこの国際協働 PBL を通して鳥取に興味を持ち、卒業後に鳥取県で JET（The Japan Exchange and Teaching）プログラムに参加できるよう、申請の際に鳥取県を希望したそうだ。

### ④ 仕事に役立つコミュニケーション力を身につける

鳥取大生からは「リアクション（反応）」の重要性についての意見が多くみられた。「自分の話に対するリアクションが大きくてとても気持ちがよかった」や、「良いコミュニケーションには聞き上手になることも重要」など、自分から積極的に発信することだけでなく、聞き上手になることも良いコミュニケーションに欠かせないことを学生自ら見出していた。さらに、良い交流をするために「常に質問を考えながら聞くようにした」など、自分自身の課題を発見・解決しようと思っていたことも分かった。

### ⑤ その他の気づき

多くの鳥取大生とバーモント大生が共通して述べていたことから、お互いがターゲットランゲージを使って会話をすることで「同じ土俵に立っている」という共有意識を持っていることが分かり、毎回の交流の中で切磋琢磨する姿勢が多く見られた。

## 5. 国際協働 PBL における学生の学び

筆者らは学生が「主体的な学び」を通してグローバル人材として必要な能力を養成することを目指し、全学共通科目「世界の中の日本」で、米国・バーモント大学の学生との国際協働 PBL を実施した。両校の学生が目指すべき到達目標として 4 項目を掲げ、学生のふりかえりレポート結果からそれらの目標が概ね達成できたと言えた。しかし学生の到達目標が達成できたからといって、果たして「主体的な学び」も実現していたのだろうか。そのことについて、次に考察していきたい。

竹内（2020）は、主体的な学びが実現するための共通条件として「学びへの強いモチベーション」を挙げている。今回の取り組みに参加した学生の全員に共通していたことに、「お互い良いコミュニケーションをとり深く理解し合いたい」という強いモチベーションがあった。そしてその目標を達成するために必要な語学力やコミュニケーション力を向上するためには何をしたらいいのかを、各々が思考し学びを実践していた。また、こうした思考を生み出したきっかけとして毎回の交流後に実施した「ふりかえりアンケート」が果たした役割は大きい。このことは、学生の『毎回の交流で前回の反省を活かした交流ができたため、自分の能力の向上を感じ取ることができた』というコメントからも見ることができる（表 2）。以上のことから、今回「世界の中の日本」で実施した国際協働 PBL によって学生の「主体的な学び」が実現していたといえるのではないかと。

もう一点、本取り組みの特筆すべき成果として「共有意識 (Shared mindset)」の醸成について触れておきたい。グローバル化の加速とともに増加する異文化コミュニケーションの場で見られる問題として「us versus them(我ら対彼ら)」思考がある。人間の自然な反応として、私たちは自分が属するグループ(人種、地域、文化、職種、等)を他より肯定的に見る傾向があり、そうした傾向は良好なコミュニケーションや協働作業の妨げとなっている(Haas and Mortensen 2016)。例えば、今回の取り組みが共通言語として「英語」のみで行われていたらどうだっただろうか。「英語に不慣れな鳥取大生」と「英語を話すバーモント大生」の協働学習は必ずしも「同等」ではなく、容易に「us versus them」思考を作り出してしまったかもしれない。しかし幸いなことに、今回はお互いがターゲットラングージを使って交流をしたことで、学生らは真に対等に経験を共有することができたのではないか。そのことは学生らのふりかえりからも読み取ることができる(表2)。もちろん、お互いが母語以外の言語で意思疎通をはかっていかななくてはならず、その難しさを指摘する声もあった。しかし、そうした困難をどのように解決していくのか試行錯誤することも「主体的な学び」に結びつくとして筆者らは考えている。今回はお互いのターゲットラングージを使った交流だったが、今後「英語のみ」や「日本語のみ」での国際協働PBLを行っていく際には、参加する学生同士が「us versus them」ではなく「we(私たち)」として活動できるような「共有意識」の醸成にも取り組んでいきたい。

国際協働PBLで成果を出すために「教員間の密で良好なコミュニケーション」が不可欠であることを最後に述べておく。今回の取り組みでは、後期授業が始まる2ヶ月前からバーモント大学側教員と頻りに連絡を取り合い、授業計画を練った。E-mailやGoogleドキュメント、Zoomなどを使ってお互いのアイデアを何度も出し合い、時差があるにも関わらず迅速な返信を心がけることで、教員同士もお互いに大変気持ちの良い交流をすることができた。Hagley(2017)の報告によると、オンラインの国際協働学習において成果が出た例はいずれも教員同士の交流が多かったそうだ。現在、教員間でも今回の取り組みについてのふりかえりを共有しているところだ。今回の反省点を明らかにし、次回さらに有意義な授業を展開できるよう準備していきたい。

#### 参考文献

- 1) 栗田佳代子(2017)「インタラクティブ・ティーチング-アクティブ・ラーニングを促す授業づくり-」河合出版。
- 2) 経済産業省(2018)「人生100年時代の社会人基礎力」,  
[https://www.meti.go.jp/committee/kenkyukai/sansei/jinzairyoku/jinzaizou\\_wg/pdf/07\\_06\\_00.pdf](https://www.meti.go.jp/committee/kenkyukai/sansei/jinzairyoku/jinzaizou_wg/pdf/07_06_00.pdf) (accessed in 6 January 2022).
- 3) 蕪木絵実 他(2021)「コロナ禍における国際交流の新たな取り組み」大学教育研究年報, 鳥取大学教育支援・国際交流推進機構教育センター, 26号, 22-32.
- 4) 竹内謙彰(2020)「主体的学びが成立するための条件の探求」立命館産業社会論集, 56(2)。



- 5) 中央教育審議会（2012）「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて-生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ（答申）-」文部科学省.
- 6) 文部科学省（1998）「21世紀の大学像と今後の改革方策について-競争的環境の中で個性が輝く大学（答申）-」.
- 7) 溝上慎一（2014）「アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換」東信堂.
- 8) Coral, J., S. (2009) Engineering Education for sustainable future. UPC UNESCO Chair for Sustainability, Barcelona.
- 9) Haas, M., Mortensen, M. (2016) The Secrets of Great Teamwork. Harvard Business Review, 70-76.
- 10) Hagley, E., Thomson, H. (2017) Virtual Exchange: Providing International Communication Opportunities for Learners of English as a Foreign Language. 北海道言語文化研究, No.15, 1-10.
- 11) Jalinus, N., Nabawi, R., A., Mardin, A. (2017) The Seven Steps of Project Based Learning Model to Enhance Productive Competences of Vocational Students. Advances in Social Science, Education and Humanities Research, 102, 251-256.
- 12) Lee, W., Y., Tsai, C., C. (2011) Students' perceptions of collaboration, self-regulated learning, and information seeking in the context of Internet-based learning and traditional learning. Computers in Human Behavior, 27 (2), 905-914.
- 13) Neal, G., Mullins, T., Reynolds, A., Angle, M. (2013) Global collaboration in teacher education: A case study. Creative Education, 4 (9), 533-539.